第２課　大争闘

【暗唱聖句】

主の御使いはサタンに言った。「サタンよ、主はお前を責められる。エルサレムを選ばれた主はお前を責められる。ここにあるのは火の中から取り出された燃えさしではないか」ゼカリヤ3:2

【今週のテーマ】

今週は、目の前に現実の背後にあるもの、ヨブ記の中心テーマでもある、善と悪との大争闘について学びます

【日曜日　地上の小さな天国】

「ウツの地にヨブという人がいた。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きていた。七人の息子と三人の娘を持ち、羊七千匹、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭の財産があり、使用人も非常に多かった。彼は東の国一番の富豪であった」ヨブ1:1～3

ヨブの特徴・・・無垢。無垢とは仏教用語で煩悩のけがれがなく，清らかなことをいいますが、一般には，精神や肉体がけがれておらず純粋なことを意味します。ヘブライ語は完全、誠実さに溢れているといった意味の言葉の派生語です。正しい人とは、神様に対してまっすぐな人を意味します。それゆえ、神を畏れ、悪を避けていました。ノアも「ノアは神に従う無垢な人であった。ノアは神と共に歩んだ」（創世記6:9）と書かれてあります。純粋で混じりけがない、幼子のような純粋な信仰者であるということです。それゆえ、神を畏れ、悪を避け、神と共に歩みました。これらは神に選ばれる者たちの共通した特性です。

また、ヨブには七人の息子と三人の娘の10人の子供があり、東の国一番の富豪と書かれてあるほど、豊かな財産もあたえられ、非常に祝福されていた神の家族であったことが最初に書かれてあります。つまり、災いが突如、このような家族に襲うことは考えられない、小さな天国にいるかのような印象を読者に与えます。

「息子たちはそれぞれ順番に、自分の家で宴会の用意をし、三人の姉妹も招いて食事をすることにしていた。この宴会が一巡りするごとに、ヨブは息子たちを呼び寄せて聖別し、朝早くから彼らの数に相当するいけにえをささげた。「息子たちが罪を犯し、心の中で神を呪ったかもしれない」と思ったからである。ヨブはいつもこのようにした」ヨブ1:4，5

クリスチャンの親なら子どもが神の御前に正しく歩んでいるかどうか心配になることでしょう。豊かな生活をしていたとしても、それが霊的な守りになるわけではありません。ヨブが無垢で正しい歩みをしていても、子どもたちもみな同じように歩んでいるとは限りません。「息子たちが罪を犯し、心の中で神を呪ったかもしれない」と思ったとあるように、ヨブは子どもたちが不安だったようです。そのため、食事会の席ではいつも子供たちのために主にいけにえを捧げ、一家の祭司として赦しを請うていたのです。

【月曜日　宇宙規模の争い】

「ある日、主の前に神の使いたちが集まり、サタンも来た」ヨブ1:6

ヨブ記1章6節から場面は急展開します。人間には見えない、全くの異空間の描写で、そこに主なる神とみ使いたちが集まっていました。本来、麗しい天の描写であるべきはずが、少し穏やかではなくさせているのは、そこにサタンがやってきたからです。ここに宇宙規模の争いが起きていることがわかります。

まず主は「お前はどこから来た」のかと尋ねます。するとサタンは「地上を巡回しておりました。ほうぼうを歩きまわっていました」と答えます。ここからサタンは地上を動き回っていることがわかります。これは現実なのです。すると主は、（ほうぼうを歩き回ってきたのなら）「わたしの僕ヨブに気づいたか。地上に彼ほどの者はいまい。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きている」と言います。この言葉がサタンにヨブを攻撃するきっかけを作ってしまいます。サタンは「ヨブが、利益もないのに神を敬うでしょうか…御手を伸ばして彼の財産に触れてごらんなさい。面と向かってあなたを呪うにちがいありません」と主を挑発するのです。そこで主はサタンに、「それでは、彼のものを一切、お前のいいようにしてみるがよい。ただし彼には、手を出すな」と言います。ここからヨブの苦難が始まりまるわけです。目に見えないところで、このような神とサタンとのやり取りがあることなど知る由もありませんでした。

さて、この神とサタンとのやりとりから何がわかるでしょうか。

１　神は人間の正しさをサタンに主張すること。

　　救いとは、サタンに捕らわれている者を神が解放してくださることを意味している。その条件は神の御前に正しく歩んでおり、サタンの側に属していないということ。また、神はヨブ（神も子たち）を信じていることもわかる。

２　サタンは人間を神から引き離そうとすること。

　　誘惑や災いなど、様々な方法を用いて、サタンは神の子たちを神から引き離そうとしている。

３　サタンの攻撃には制限がかけられていること。

　　ただし、サタンの攻撃には制限がかけられている。耐えられないような試練がないのはそのためである。

４　神とサタンとの大争闘に人間が巻き込まれているということ。

　　なぜ、人間が大争闘に巻き込まれることになったのかはわからない。しかし、現実として受け止め、行動をとらざるを得ない。

【火曜日　地上での争い】

サタンの反逆は天で起こり、神とサタンとの大争闘は天で始まりました。しかし、その戦いの舞台は地上に移されました。それは神の最も大切なもの（人間）たちが、地上にいるからです。神には勝てないサタンは、神ではなく、神の愛する子どもたちを攻撃することに決めたのです。

・創世記3:1～4　サタンは蛇を通して人間を誘惑してきた。

・ゼカリヤ3:2　「主の御使いはサタンに言った。「サタンよ、主はお前を責められる。エルサレムを選ばれた主はお前を責められる。ここにあるのは火の中から取り出された燃えさしではないか。」

＊大祭司ヨシュアはバビロン捕囚から解放されて帰還した人々の指導者で、エルサレム再建のために尽力した。そのヨシュアがサタンから訴えられたとき、み使いがヨシュアを弁護している幻をゼカリヤは見せられる。「火の中から取り出された燃えさしではないか」とは、バビロン捕囚において、すでに神からの十分な愛の懲らしめを受けたことを意味している。

・マタイ4:1「さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、“霊”に導かれて荒れ野に行かれた」

＊悪魔から誘惑を受けるためにイエスは聖霊によって荒野に導かれたとある。なぜ？　それはイエスが誘惑を受け、それに勝利することによって、罪の誘惑に対して人に代わって勝利するため。また私たちの罪の誘惑に対処する模範となるため。

・第一ペテロ5:8 「身を慎んで目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回っています」

＊悪魔がほえたける獅子のように食い尽くそうと探し回っているとは、何とも恐ろしい表現です。だからわたしたちがするべきことは、身を慎んで、目を覚ましていることです。身を慎んでとは、シラフで、あるいは正常な状態で、自らをしっかりコントロールしている状態のことを言います。目を覚ましているのも同様です。寝ぼけている、夢うつつでいると、霊的現実の世界が見えてきません。祈りとみ言葉の生活をおろそかにすると、霊的眠った状態に陥ってしまうので、注意しましょう。

・第一ヨハネ3:8 「罪を犯す者は悪魔に属します。悪魔は初めから罪を犯しているからです。悪魔の働きを滅ぼすためにこそ、神の子が現れたのです」

＊罪を犯すものは悪魔に属してしまいます。だから、神の子が悪魔の働きを滅ぼすために来てくださったのです。

・黙示録12:9 「この巨大な竜、年を経た蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれるもの、全人類を惑わす者は、投げ落とされた。地上に投げ落とされたのである。その使いたちも、もろともに投げ落とされた」

＊天において、悪魔が神に反逆し、地上に投げ落とされた光景が描かれています。

このように、聖書の中には文字通り悪魔の存在を指し示す多くの聖句があります。サタンを神話的なものとしてとらえるのではなく、現実のものとして真剣にとらえる必要があります。

【水曜日　宇宙の縮図としてのヨブ記】

ヨブ記の冒頭からわかること。

1　わたしたちが知りえない別次元の世界があること。

2　地上と天上とが、いかにつながっているか。地上で起こることは天上と無関係ではない。

3　天において、神と悪魔との対立があるということ。

これらのことからわかるのは、ヨブ記の中に見え隠れするのは、天における大争闘の縮小版であり、これらはすべてわたしたちの日常生活とも無関係ではないということ。つまり、ヨブと同じようなことがわたしたちの身の回りにも起きてくる可能性があるということです。

大争闘の始まり

「ああ、お前は天から落ちた。明けの明星、曙の子よ。お前は地に投げ落とされた。もろもろの国を倒した者よ。かつて、お前は心に思った。「わたしは天に上り王座を神の星よりも高く据え、神々の集う北の果ての山に座し雲の頂に登っていと高き者のようになろう」と。」イザヤ14:12～14

「人の子よ、ティルスの王に対して嘆きの歌をうたい、彼に言いなさい。主なる神はこう言われる。お前はあるべき姿を印章としたものであり、知恵に満ち、美しさの極みである。お前は神の園であるエデンにいた。あらゆる宝石がお前を包んでいた。ルビー、黄玉、紫水晶、かんらん石、縞めのう、碧玉、サファイア、ざくろ石、エメラルド。それらは金で作られた留め金でお前に着けられていた。それらはお前が創造された日に整えられた。わたしはお前を翼を広げて覆うケルブとして造った。お前は神の聖なる山にいて火の石の間を歩いていた。お前が創造された日からお前の歩みは無垢であったが、ついに不正がお前の中に見いだされるようになった。お前の取り引きが盛んになると、お前の中に不法が満ち、罪を犯すようになった。そこで、わたしはお前を神の山から追い出し、翼で覆うケルブであるお前を火の石の間から滅ぼした」エゼキエル28:12～16

神の律法は愛であり、強制された服従を望まれません。だから、すべての道徳的被造物に自由意志を与えられました。しかし、この自由意志をサタンは悪用しました。しかも、サタンはキリストの次に位置する高い位が与えられていたにもかかわらずです。なぜ、サタンの心に高慢という罪が生じたのか、明らかにされていません。

【十字架での答え】

ヨブ記は苦難の意味を理解するうえで、大きな助けとなる書です。しかし、苦難の意味の答えがすべてヨブ記に書かれているわけではありません。そのため他の書巻も並行して読んでいく必要があります。しかし、それでもなお、「鏡におぼろに映ったものを見ている」（第一コリ13:12）程度の理解しかできないかもしれません。

ヨブ記の最初に重要な存在としてサタンが登場しますが、その後は一切姿を出さなくなります。ヨブの家族やヨブ自身に降りかかってくる数々の災いの背後にサタンがいるのだと想像しながら読むわけですが、最終的にこのヨブを巡る大争闘の中でサタンがどうなっていくのかについても語られていません。むしろ、最後は神とヨブの二人の関係に焦点が当てられていきます。

このことからわかるのは、確かにわたしたちはサタンの存在を無視するわけにはいきませんが、それよりも最も重要なのは神との関係なのです。結局のところ、この試練を通して神はヨブをさらにご自身に引き寄せられたbのです。ちなみに、サタンの敗北はキリストの十字架において決定的なものとなりました。